

# BASARE

九重からこのえへ

vol. **08**

---

## 特集1：ここづくり

後藤 文生さん、岐部 笙芳さん  
井上 哲志さん、井上 クリスティーナさん  
戸高 晋輔さん、戸高 朋子さん  
木船 至樹さん、足達 龍哉さん  
藤澤 昌由さん、音成 葉子さん

---

## 特集2：エノハの住む川

工藤 治良さん

---

### ●あんしのカバンの中

佐藤 弘子さん、佐藤 ハツエさん  
佐藤 嘉子さん、竹野 次男さん  
日野 フジエさん

# ここづくり

あなたは九重町で“ものづくり”をする人たちのことを知っていますか？  
職人やアーティスト、作家、ライターなど様々な技を持った人たちが集まり、暮らしの中で見つけた好きな場所や人、そして自分たちのことを知ってもらうための活動をはじめました。それが“ここづくり”です。



普段は個人で活動しているメンバー  
ただひたすらに“もの”と向き合ってきた。  
孤高のものづくり達が集まった時、なにかおもしろいことが起こりそうな気がして・・・  
この“ここづくり”は、その思いがキッカケで生まれた。  
グループとして活動する中で、それぞれのものづくりに対する考え方の共有、技術を持ったものづくり達が、学校へ出向いて行うワークショップ(ものづくり体験)の実施、  
また、ホームページやオリジナルのここづくりマップ(ここず)の作成などを進め、技術高い九重の職人技を広く知ってもらう為の活動を進めている。



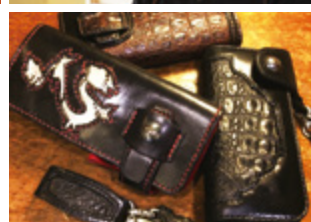
## 戸高 朋子

トダカウdstスタジオ  
素材を生かし、尚且つ  
機能を重視  
それでいて無駄のない  
デザインは、木のこと  
を知り尽くしているか  
らこそその為せる技



## 木船 至樹

ファー・イースト・ホライズン  
代表 革細工職人  
旅と釣りをこよなく愛する格闘家  
使い手の需要にあわせ、完全オ  
リジナルの革製品を生み出す木  
船さんは、使う人の気付かない  
習慣やしぐさを見逃さず、もの  
づくりに反映させている







## 岐部 笙芳

竹工芸作家  
幾何学模様のように 緻密な細工  
と竹素材の艶かしさが作り出す美  
の世界  
2014年春の褒章で紫綬褒章を受章  
作品はメトロポリタンミュージア  
ムにも収蔵されている



## 後藤 文生

grow オーナー  
木工職人  
作品を手に取った時、  
自然と微笑んでしまう  
それだけ丁寧につくら  
れた後藤さんの作品  
は、顧客との対話の中  
で磨かれていく機能美  
が形として現れる



ちょっとした縁やタイミングが  
ここで“ものづくり”を始めるきっかけとなった



## 井上 クリスティーナ

テキスタイル作家  
自然をモチーフに形や色  
を平面上に落とし込む  
そのデザインは独創的で  
色鮮やか



## 戸高 晋輔

トダカウdstスタジオ  
動き続ける木と向き合  
いながら、作品に表情  
を与えていく  
創り出した形の先にあ  
る楽しさおもしろさ  
を、その知識と経験で  
提案し続ける





## 足達 龍哉

つみきの森  
MUGA オーナー  
子どもたちの心身を伸  
ばす、とびきりの遊び  
場を目指し、そのアイ  
デアと行動力で、訪れ  
る子どもたちがワクワ  
クするようなものを  
日々制作している



## 藤澤 昌由

書道家

フランスやイギリスの画家を九重町に  
招いた際のコーディネートをするな  
ど、文化事業への造詣が深い  
また、九重町の歴史や人物などについ  
ての知識が豊かであり、物語のように  
私たちに伝えてくれる



## 音成 葉子

ライター  
何気なく感じ、見過ごしてしまいがちな  
日々の自然の変化や、日常の出来事を鋭い  
感性で描き出す



## 井上 哲志

家具デザイナー  
有機的な曲線の中に美を  
表現した井上さんの作品  
は、シンプルなのに存在  
感のある家具が特徴  
web デザイナーとしての  
顔も持ち、ここづくり  
HP の制作も行っている



ものづくりを始めたきっかけは  
小さなころのワクワクした記憶だったのかもしれない



ここづくりの HP はこちらから  
[www.kokozukuri.com](http://www.kokozukuri.com)





## ここづくりワークショップ

～木の皮を剥く、切る、磨く、削る、名前を焼く～

素朴なえんぴつ作りの中にはものづくりの基本が散りばめられていた

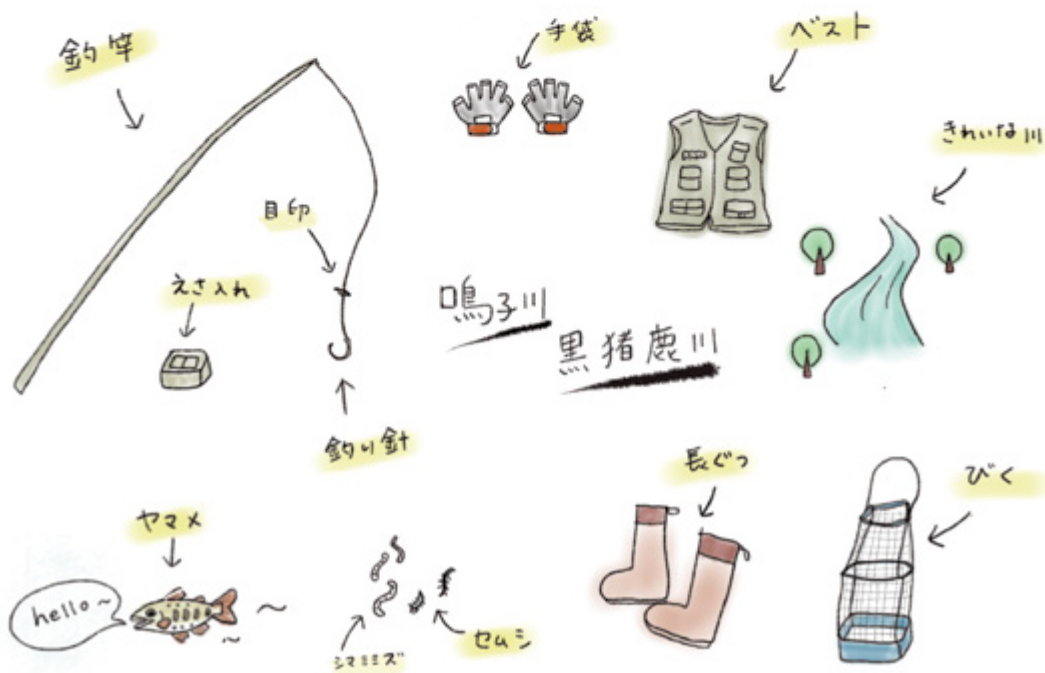
南山田小学校の子ども達と一緒に行ったものづくり体験  
 簡単なようで奥が深い。思わず子ども達も夢中になってしまい  
 ついつい時間がたつのを忘れてしまう  
 最後には自分の力で作った世界で一つだけのえんぴつができあがり、  
 ここづくりメンバーにとっては、貴重なふれあいの時間となった



釣り名人の  
工藤さん

# イノハの 住む川

取材・文章 菅田照久



## 釣りキチ〇〇 ヤマメ釣り編

「このえを流れる渓流を見ていつも思い出すのがこのマンガ。海沿いで育った私は、父の影響で幼い頃から海釣りに親しんだ。しかしこのマンガと出会い、渓流でのヤマメ釣りに強く憧れた。だが近くにヤマメが住む渓流はない。父に何度も渓流に連れて行くとねだったが、渓流までは車で片道3時間。結局実現しなかった。ヤマメが住む渓流は、私にとつてずっと憧れの場所のままだった。そんな憧れの場所が、このこえには、ある。」



## 地元の《釣り名人》

「このえの渓流でのエノハ（ヤマメの地元での呼称）釣りを取材したい！というこで今回お願いしたのは工藤治良さん。町内のあらゆる川に精通する『釣り名人』だ。『いいですよ、早く受けていただけ』。渓流釣りの禁漁期間（10月1日～2月末日）が迫った平成29年9月25日朝、釣行がスタートした。」

## いざ、釣行 やまめつり 飯田方面へ

「龍門の滝を上ろうとしているエノハを見た「飯田には多めに放流している」「梶屋や黒猪鹿の川は小さいが、大きいのがいる」「エサはセムシ（トビケラ類の幼虫、水中の小石の裏に巣を作る）が一番いい」川へ向かう道中から工藤さんは釣りの話が止まらない。名人は釣りへの情熱で溢れていた。」

9月下旬は渓流釣りのベストシーズンとはいえない。よって一匹でも釣ればいいな、と思っていた私に「10匹は釣りたい」と驚くような抱負を語ってくれた。おのずと期待が膨らむ。

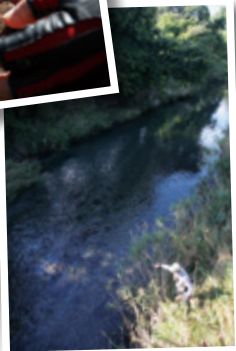
最初にやってきたのは鳴子川。透明度抜群で川底がはつきり見える。釣り好きじゃなくても思わず覗き込んでしまふ美しさだ。こんな川は都会にはまずない。そんな川でいよいよ美釣開始。しかし魚の影が見えない。「いいないねえ」工藤さんはすぐ見切りをつけて上流のポイントへ移動した。

## 2カ所目で初ヒット

次のポイントの川沿いには高さ2mはあろうかという葦がぎっしり生えていた。長年堆積した砂や富栄養化のせいか、「近年はどれも葦がびっしり生えていて、いつも釣つていたポイントがごとく潰されている」という。しかし工藤さんは自分より背の高い葦の茂みを、足を使い、身体を預けながらかき分けて、ずんずん進んでいく。この人、若い…。

茂みを抜けてポイントに着いたが、ここの魚の気配がない。エサのセムシもあまりいない。川の形も変わっている。どうやら台風で大水が出た影響が残っているようだ。工藤さんは気配を消して葦の陰から竿を出す。これはやはり厳しいか…。そんな思いがよぎり始めた時、竿が曲がった。

竿を抜きあげたその糸の先に魚体が見える。「釣





れた！エノハ？！エノハだ！」私は思わず声が出た。魚体には鮮やかな斑紋模様（バーマーク）がある。ヒレが黄色みがかったいて、口が大きくギザギザの歯が生えていかにも肉食魚らしい。体の表面にはコーティングされたような光沢がある。小ぶりだが真正正銘のエノハだ。「きれいやな〜」憧れの魚を目の当たりにして、私は一気にテンションが上がった。エノハはその魚体の美しさから『溪流の女王』と呼ばれるが、その名にふさわしい見事な魚体だ。「もっと大きいのを釣るよ」感慨にふける私を尻目に、工藤さんは釣りを再開した。

## こんな場所に?!

次に工藤さんは思わぬ場所を攻め始めた。少量だけ水が流れ込んでくるブロックの間隙だ。幅は5cmあるだろうか？一見魚がいるとは思えないが、「エノハはこんな場所に入ってきて流れてくるエサを待っている」という。そして実際にそこで2匹目を釣り上げてしまふ。

2匹目は20cmの堂々としたエノハ。1匹目より長さも体高も一回り大きい。このサイズになると貫録も感じる。こんなに大きいのがあんな小さな隙間に…。これは工藤さんでなければ釣り上げられなかった魚だろう。

続いて3匹目。今度は流れ込みで釣り上げた。小ぶりだがこちらも立派なエノハだ。立て続けに3匹。魚影が濃い中で釣った3匹ではない。魚が見当たらない厳しい状況の中から、引っ張り出した3匹だ。

好きなことをしていると  
すぐに時間が経つ

その後も数か所回ったが、どこにも魚の気配が感じられない。小さなアブラメ（タカハヤの地元での呼称）が数匹釣れただけだった。「南山田に行ってみよう」工藤さんが言った。この時点で昼にさしかかっていたが、納竿の気配はない。「好きなことをしているとすぐに時間が経ってしまう。お昼を済ませて、黒猪鹿でやってみよう。あんだ、時間大丈夫？」もちろんOKだ。それにしても、フットワークの軽さとスタミナがすごい。まるで20代の人と釣りに行っているようだ。

## 午後は黒猪鹿川へ

お昼ご飯を挟んで午後の部が始まった。場所は黒猪鹿川。川幅は平均2m位だろうか？小さな川だ。ここで夏場に30cmのエノハが貸針（地域の伝統的な魚を捕る仕掛け）にかかったそうだが、そんなに大きな魚が本当にいるのだろうか？しかし、この日最大のエノハがここで釣れる。

## この日最大のエノハ

セムシをとる場所がなかった黒猪鹿川では、シマミミズをエサに使った。アブラメばかり釣れていたが、突然、竿が大きく曲がった。「でかい！」これまでとあまりに違うひきに、私は一瞬コイでもかかったのかと思った。しかし水面に顔を見せたのはエノハだった。これは大物だ！足場が高く、タモ網がなかったが、「これくらいなら大丈夫」と工藤さんは一気に魚を抜きあげた。釣れたのは24cmの大物だった。「やりましたね！」これには工藤さんからも満足の笑みがこぼれた。





## 納竿、次は平成30年3月だ

この後納竿となった。私は工藤さんの釣りを一日見せてもらい、4匹釣れたのが見られて満足だった。しかし工藤さんはやや不満げ。いつもはもっと釣れるのだらう。ただ、これでまた工藤さんは釣りに行くのだらうと思った。悔しくてまた行きたくないのが釣りだ。9月でシーズンが終わり、次に渓流釣りが解禁になるのは平成30年3月だ。



釣れなければ悔しくて、釣れれば嬉しくて、また行きたくなる。

工藤さんはその後川沿いを釣り歩いた。川の真上に木が茂って竿が振りにくい所でも、あつさり狙ったポイントに投げ込んでいく。見事だ。そして必ず川から離れたり、しゃがんだりして釣る。魚から人が見えないようにするためだ。「警戒心が強いエノハを釣るには大事なことなんよ」と工藤さん。豊かな川、それにこういった釣り人の技術や知識、気配りが加わって初めて釣れるエノハ。釣るのは難しいが、だからこそ釣れた時の喜びが大きい。そして、釣れなければ悔しくて、釣れたら嬉しくて、また行きたくなる。それが釣りの魅力だ。

## 贅沢な夕食



この日の夜、我が家では工藤さんが釣ったエノハの塩焼きが食卓に並んだ。贅沢な夕食。釣りは帰ってから「食べる」という2度目の楽しみがある。食べてみると「うん、美味しい！」白身でくせがなく、やわらかい。とても食べやすい味だ。おのずと箸がすすみ、きれいに食べてしまった。釣りも食も堪能した日となった。

## エノハが住める環境



なかなか釣れないだけに釣れた時の喜びが大きいエノハ。それは言い換えれば個体数が少ないということだ。禁漁期間が設けられたり、放流が定期的に行われたりするのには個体数を確保するため。また、エノハは決まった条件下でしか生きられない。冷水を好み、水温が24度を超えると生きられないといわれる。よって生息エリアは上流。さらに、豊富なエサがないといけない。川沿いに木があることで昆虫類が川に落ちたりして供給されるし、水がきれいなことでも水生昆虫などが多く生息できる。そして、川がS字に蛇行するおかげで瀬ができ、産卵することができる。それから、川底がこぼこして複雑な流れがあることで水中に酸素が行き渡り、成長を促してくれる。

このエノハが住める環境は、こういった様々な条件が成立し続けることで維持されている。これはもちろん地元の人々の努力のおかげに他ならない。近年は大雨でその環境が根こそぎ流されてしまうような、どうしようもないこともある。しかし、人の力のできることをして、エノハの住む川をこれからも守っていかたい。このえに住む一人として、そう思った釣行だった。

佐藤 嘉子さん



あっ!!



目薬は必需品です



あ〜てい〜お茶

筆記用具



大体んしが常備しちる目薬



佐藤 弘子さん

私たちはお揃いの手袋です♪

安全第一で運転しています



写真は緊張しますね〜



見たい

# カバンの中



家で淹れてきました



筆記用具



クシはこんタイプがいいですね〜



手さげバックに詰め込んで〜♪



教室で使うファイル



何でも入るバックです！  
いつ買ったかは  
忘れました(笑)



日野 フヂエさん





竹野 次男さん

腕時計をなくしたので、今はこの置き時計を持ち歩いています

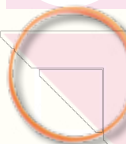
おしえわになります!!



バックは手さげタイプで♪



孫のペンケースを愛用しています。孫はこのペンケースのことを、忘れちゃいましたけどね(笑)



認知症サポートリング

脳イキ教室の必需品



大事に使いよります

荷物が運べて杖代わりになって  
疲れた時には座れる!!



知りたい

# あんの



ショルダータイプが使いやし〜



あっ!!



お出かけ必需アイテム  
シルバーカー



反射バンド



佐藤 ハツエさん

孫の使っていた水筒なんですよ〜



まだまだ使えますよ〜



筆記用具

バスの時刻を確認するのに必需品なんです



# BASARE

九重からこのえへ

発行日：2018年3月15日 発行人：九重町公民館 BASARE プロジェクト 本書への問い合わせ先：九重文化センター 大分県玖珠郡九重町  
TEL：0973-76-3888 Mail：bunka@town.kokonoe.lg.jp Facebook ページ：https://www.facebook.com/basare.kokonoe/  
バサレプロジェクトは九重町 HP からご覧いただけます。本書は、無料で配布しております。  
本書の一部または全部を無断で複製、複製することを禁じます。 Printed in Japan © Kokonoe Town.



ちょっとした縁やタイミングが  
ここで“ものづくり”を始めるきっかけとなった

QRコードから  
九重町バサレページに  
ジャンプします。



KOKONOE FreePaper 2018.3

「九重からこのえへ、しあわせのおすそわけ」をテーマに、ふだん着姿のたくさんの  
いいもの・いい人を町の人が発見し、まちの人へ伝えるフリーペーパーです。  
\* バサレとは、大分の方言で「たくさん」という意味です。

vol. 08